

海軍

私の戦争体験

宮城県 千坂定次

私は志願兵として昭和十七年五月一日、横須賀第二海兵団に主計兵として入団、三か月間一般軍事教練その他海軍主計兵調理術教科書による専門教育を受け、昭和十七年八月一日横須賀海軍航海学校定員要員として配属され、同校に昭和十九年四月初めまで勤務しました。

同月初めに南方派遣第二六特別根拠地隊塩田隊に配属となり、同年四月八日仮入団のため横須賀第一海兵団へ入団、約一週間後編成を終えました。塩田隊の任

地は西部ニューギニア方面と聞かされ、乗船は広島県呉軍港からとのことでした。

四月末横須賀駅を出発、一路呉港へ向かった。出発に当ってこんなことがありました。当時、横須賀市に従兄が住んでいました、私の南方への出発にあたり、万々に備え写真を撮ってさらに遺髪と爪の一部を残して行くように言われましたが、それを復員後に渡され感無量でした。なお赴任手当として当時百三十五円程支給を受け、初めて百円札を拜み、早速革の財布を購入したことが思い出されます。

さて、呉に到着後直ちに呉海兵団に仮入団となり、乗船までの間特設砲艦「寿山丸」にて諸物資の支給を受け、毎日積込作業に従事しました。五月八日夜呉港を出発し、夜の瀬戸内海を一路下関の仮泊地に向けて

の航行でした。

五月十日、下関の仮泊地では二十三隻の船団となり、両側を駆逐艦等に守られ九州沖を南下しました。初めて故国を離れる私にとっては、再び日本に帰ることが出来るかと不安でならなかったのが実感でした。乗船中は何時も上甲板にいたため夜間は潮風で身体がしめりがちになっていたものでした。

沖繩と台湾の間位を航行中と記憶している時のことです。突然、乗船中の「寿山丸」の十五センチ砲が砲撃を開始したのです。丁度昼間でしたので魚雷がどの方面から来るか海面を見つめるばかりでした。それは敵潜水艦の潜望鏡発見による砲撃とのことでしたが、見張員の見誤りとのことで一件落着きました。もし魚雷の攻撃であつたらと思うと冷汗ものでした。

船団は常にジグザグ航法により敵潜水艦の攻撃を避けての航行でした。五月二十二日朝、台湾高雄港に入港。即上陸許可があり、高雄で久し振りに台湾バナナを食べたことが忘れられない思い出となりました。

翌五月二十三日、高雄港を出港し一路南下、比島マ

ニラに向けて航行、その間何事もなく五月二十七日早朝マニラ湾入口に到着。コレヒドール島の要塞を右手に見てマニラ湾に向け進み、正午頃接岸。当日は海軍記念日で、我々は上陸許可を受け、市内見物をしました。ところが四、五歳の子供が軍票を驚づかみにして、タバコを欲しがっている姿を見て驚くばかりでした。

船団はマニラでシンガポール方面とマンボン方面とに分かれ、それぞれ前者は二十隻、後者は三隻の編成で、マニラ湾の夕日を眺めつつマニラを後にしました。マニラを過ぎセレベス島を過ぎる頃、米機動部隊の比島方面へ北上中との情報に、船団は途中ハルマヘラ港に仮泊となり、その約一週間の後ハルマヘラ港を出発したものの所属部隊への到着には不安が伴って来ました。

ハルマヘラ港出港後は隼戦闘機の上空援護を得て、下関仮泊地出港後約二か月を経た七月九日、アンボン港入港、上陸となり、即現地の第二十警備隊に仮入団となりました。アンボン島到着間もなく空襲を受け、仮入隊の身であるため防空壕の入口にいましたが、生

暖かい爆風が強く耳をつんざくようでした。それから毎日、朝早くから一日中空襲に見舞われる生活が続きました。

二十日位後、西部ニューギニアから転進して来た第二十五特別根拠地隊第二十六警備隊小山部隊篠木隊に転属することになり、終戦までアンボン島にて勤務することになりました。同部隊は各鎮守府管轄の混合部隊であり、私のような東北人は特に言葉で苦勞しましたが、懐かしい思い出でした。

昭和二十年八月十四日早朝、豪州軍の艦艇がアンボン島の入口に糧食受領のため入港したことに端を発し、隊内は大騒ぎとなり、奥地への転進準備、あるいは重要書類の焼却処分等で大騒ぎとなりました。

それはすでに日本の降伏については交戦国において決定されていたため、われわれには翌八月十五日重大放送があるので全員集合の達しがありました。昭和二十年八月十五日正午頃と記憶しているが、玉音放送を聞き、その後は武装解除され、收容所への移動等に毎日忙しい日々が続きました。

私は虫垂炎となりマンボン海軍病院で手術を受け、二十三日位仮設病院に收容され、その後は收容施設のあるセラム島へ本隊より一足先に移動となりました。セラム島はアンボン島の北方に位置し、その收容施設は日本軍が自給生活するため監視体制のない收容所として生活出来た所でした。

昭和二十一年のお正月を收容所で迎え、何時の日に帰れるやらわからないまま四月頃まで過ごしました。時折帰国の話題が伝わり、殊に戦犯の恐れある者が帰国優先との話まで広がりました。

五月早々第一次帰国者がセラム島タナゴヤン港より出発し、私も第二次帰国者として昭和二十一年六月十日タナゴヤン港より十日間の船旅の末、六月二十日歌山県田辺港に入港しました。

検疫を受け翌二十一日、貨物車に荷物同然に積み込まれ、大阪經由、横浜、東京の焼野原を目のあたりにし、上野駅よりは客車に乗り、六月二十二日夢にまで見た故郷に帰りました。

思えば歌山県田辺港まであと二、三日という海上

まで来て病に倒れ、故郷の土を踏むことが出来なかった戦友に対し、心から御冥福をお祈りします。

海軍の通信

—予科練習生の教育—

富山県 井 沢 健四郎

私は富山県西砺波郡太美山村七曲という所で、大正九年五月二十日に、兄弟七人の四男として生まれました。軍隊は昭和十五年徴集で、昭和十六年一月十日徴集兵（後に志願兵）として、舞鶴海兵団に入団したのです。入団して海軍四等水兵となり、昭和十六年三月十日、横須賀の通信学校へ入校しました。我々初年兵は入団と同時に学力試験のみ課され、その者の適性、何にどのような科に適しているかを見る。例えば砲術、魚雷とか専門があるが、私は通信に適性ありと判定されたからです。

多くの科の中で、通信は学力と能力がないといけな

いので、舞鶴では約百九十名が通信に選抜されました。その時、兵科の方へは約五千五百名入団したわけですが、その中で機関、主計、医務は全然別個であります。この選抜の者が各海兵団から横須賀へ集まった。そこでまた試験があつて振り落される。百九十名のうち百六十名が残った。三十名は試験の上、舞鶴へ帰されて他の兵科に入れられる。実力本位の大変厳しい選考ですから。

通信学校を昭和十六年十一月に卒業したのですが、その間はほとんど通信専門でした。陸軍でいう射撃その他の戦闘教練はなく、一般教練は多少あるが、一週間に一度ぐらいだった。通信学科は理論・数学・英語（外国語）・海洋・気象学、航海に関するもの、そのうち難しいのは空間に電波を飛ばす、どういうふう電波が飛ぶかななどの知識でした。

私はこういう田舎町から海軍に行った。陸軍のことは、第九師団の演習場が富山の立野原にあった。それは福光町の一角にあるので、子供の時から陸軍の演習を見ていた。匍匐や前進突撃訓練などであるので、陸